

海外における日本語教育の 現状と問題点

(海外日本語講師研修会レポート)

— 4 —

1979年

国際交流基金

THE JAPAN FOUNDATION

西ドイツにおける日本語教育の現況

ポツダム大学
日本語講座講師

Klaus Kracht

まず最初にドイツにおける日本学——いわゆるヤパノロジー——について、少しばかり一般的な前置きをお話することを、許して載きたいと思います。

“ヤパノロジー”この言葉は、私たちドイツ人の研究者の間では、今日、いやいやながら止むを得ず用いられている概念です。それは、日本研究の分野でも、ますます専門化が進んでいる今日にあっては、もう正当化することができなくなっている一つの主張を表しています。しかしながら、近代のドイツにおける日本研究の初期の段階では、この概念はまだ正当な権利を持っていました。

ドイツにおけるアカデミックなヤパノロジーは、1871年に新しく建設されたドイツ帝国の帝国主義的発展の時代に始まるもので、ルドルフ・ランゲとカール・フローレンツという2人の文献学者にまで遡ります。ランゲは1874年から1881年まで東京で、ドイツ語、ラテン語および地理学を教えました。日本から帰国ののち、彼は、ベルリン東洋語セミナーにおいて、最初のアカデミックなドイツ人の日本語教師となりました。彼はまた、日本に関する最初のドイツの教科書をも何冊か公刊しました。『日本語日常会話教則本』（1890）『日本字演習及び教則本』（1904）その他が、それであります。そのほか、数多くの研究を通じて、ランゲはドイツにおける日本語研究発展のための基礎をすえたのです。

文芸学、歴史学及び宗教学の分野では、東京大学で24年間にわたり、ドイツ文学と哲学を教えたカール・フローレンツの仕事が、道しるべとなりました。彼は、1914年ハンブルク植民地研究所、のちにハンブルク大学において、ドイツ最初のヤパノロジー講座担当者となりました。何よりも意義深かったのは、彼の翻訳『神道の根本資料』（1919）と、その著書『日本文学史』（1909）でした。後の後継者はヴィルヘルム・グンデルトで、彼は文学と宗教史の分野で同じように仕事をしました。1926年には、ヤパノロジーのための2番目の講座がベルリン大学に創設され、8年後の1932年には、ライプツヒにも講座ができました。フランクフルトとボンにも日本研究の施設

が作られ、便にその上に、京都には、ドイツの日本研究所も創設されました。このようにして、30年代と40年代には、ドイツにおける日本語教育と日本研究は、すでにある程度の展開を示したのであります。

戦後、西ドイツのヤパノロジーは、ナチ体制下におけるその後退から、次第次第に漸やく回復することができました。漸やく1957年になって、ハンブルクの講座が埋められ、同じ年、ミュンヘンに新しい講座が創設されました。けれども、ドイツ連邦共和国における日本研究の本当の発展は、西ドイツの経済的復興があらゆる大学の組織の強化をもたらすに至った60年代に、始まったのです。今日、約4万人の学生を擁する私自身の大学の創設もその時期に行われています。

今日、ドイツ連邦共和国では、次の13の大学でヤパノロジーの科目が実施されています。ボーフム、ボン、ケルン、エアランゲン、フランフルト、フライブルク、ゲッティンゲン、ハンブルク、ハイデルベルク、マルブルク、ミュンヘン、チュービンゲン及びヴェルツブルクの諸大学がそれです。それに、西ベルリン自由大学でも、ヤパノロジーを学習することができます。私達は、正確な数字を利用することができませんが、諸大学で仕事をしているヤパノローク達の数約70人を教えると大ざっぱにいうことができるでしょう。現在ヤパノロジーを主専攻として勉強している学生数は約150人から200人の間に納まるかも知れません。副専攻の学生を含めると、大ざっぱに見積って、日本語学習者総数(大学生)は、約300人から400人の間になると思われれます。試験のあと、卒業生たちは、大学教師、ジャーナリスト、司書、政府及び私企業の職員等、実に様々な職業で働いています。

50年代、60年代と異って、今日では、学生の専門家が強化され、単一の専門分野に学習を専念させるような、新しい展開が見られます。たとえば、日本の地理を専攻にする者は、今では、昔のように、完全なヤパノロジー研究者として卒業しなくてもいいのです。またそれぞれの大学でも、日本研究の内部で、特定の専門分野に重点をおくようになっています。フライブルク大学は、民族学に、マルブルクは歴史学、社会学に、西ベルリンは政治学、またボンは文化人類学と社会学にそれぞれ重点をおくというようにです。

言語教育は個々の大学において全く別々の発展を遂げてきました。それは、量的には、ボン大学でもっともよく発展し、ボーフムと西ベルリンがそれに続いています。

1978年から1979年にかけての冬学期には、日本語教育の時間数は、ボンで46時間、ボーフムで36時間、ベルリンとハンブルクで31時間、ミュンヘンで28時間、フランクフルトで22時間となっており、一方、ハイデルベルク、フライブルク、エアランゲン及びヴェルツブルク等のいわゆる“小規模”大学では、日本語教育は約10時間か、それ以下で行われています。日本語教育にたいして責任を持つスタッフの数は、もっとも恵まれているボーフムで9名、ボンでは8名という状態です。小規模大学では、日本語教育に責任を持つのは、たいてい1名の講師です。それに、興味深いのは、日本研究の分野において、日本語教育のための授業時数が、全授業時間数に対して占める割合です。大規模大学では、その割合は、ほぼ、50%対50%乃至60%対40%になっていますが、中規模及び小規模の大学では、日本学科における授業は、もっぱら語学教育に重点を集中しています。それは、大規模大学における専門分化が、ますます強化されてきていることによるものです。

ここでルール大学の東アジア学科について、もう少し詳しく話すことにします。私たちの学科の新しい学習計画によると、日本研究の分野には、次の5つの課程があります。すなわち(1)言語学(2)文芸学(3)歴史学(4)経済学(5)政治学の5つです。これらの課程は、8乃至10学期の学習を経て、修士号取得の試験のときまで続きます。学生は、最初の4学期の間、専門についての訓練とならんで、語学の基礎訓練を受けます。語学の授業の受講時間数は1週間に6時間と義務づけられており、それは全受講時間数の3分の1に当たります。第5学期から第8学期の間に、学生、その専門の達成度に応じて、それぞれの専攻領域と関係する更に進んだ語学教育を受けます。言語学の文献を、政治学の学生は政治学の文献を、それぞれ読むというわけです。この期間の1週間当り義務受講時間数は、4時間です。このほかに、第1学期から第8学期までの間、学生は日本の古文と漢文の授業を受けます。現代語と古文との授業の割合は、約2対1となっています。

現代語の授業では、それぞれの専攻の専門文献と関係する読書力の涵養に主な重点がおかれています。それに反して、話される日本語を理解したり、話し言葉として、あるいは文字に書くという形で、日本語を自ら積極的に使用したりする言語能力の訓練には、余り重点がおかれていません。読書力の涵養を特に強調するのは、大学が学生を、学術的な仕事に対して能力あらしめるように、教育しなければならないことに

基づいています。すべての学生が、その主専攻のほかに、更に2つの副専攻を学習しなければならないという、西ドイツの大学の制度は、事実上、語学教育に僅かの時間しか割り当てさせない結果になっているのです。

西ドイツの大学の学生の語学力の水準を、たとえば、アングリスティック（英語・英文学）やロマニスティク（ロマンス語・文学）等、他の専門分野における言語力水準と比較してみると、その印象が衝撃的でしょう。英文学・英語学やフランス文学・フランス語学の学生たちは、すでに第1学期から、達者な会話を話し、難解なテキストを読み——その中に勿論新聞も含まれます——論文を書くことができる水準に達していますが、それは彼らとその語学をすでに高等学校（Gymnasivm）で勉強してきているからです。大学での更に進んだ学習は、これは、これらの超能力を完成させる機会を彼らに与えます。つつみかくさずに申し上げれば、学生が、その学習を終って卒業するときに、英文学・英語学やロマンス語・ロマンス文学の場合なら、すでに第1期において到達している語学水準に達しているのなら、それだけで大きな成功であるといわなければなりません。然しながら、普通の場合には、学生は、8学期乃至10学期を経たあとでも、自分の専攻に関する一冊のテキストを、多かれ少かれ何度も辞書を使用して、やっと読むことができる段階に達するに過ぎません。大部分の学生は、簡単な会話もできるようになります。

ドイツの作家ギュンター・グラスがいったように、進歩というものは、カタツムリの恰好をしているものです。過去10年の間に、このカタツムリ、それでも、それと判る速度で前に向かって這い進んできました。しかしながら、どうしたら語学教育を改良することができるかという思いに、更に頭を悩ませているのです。改良に向う一つの歩みは、日本語に関するドイツ語で書かれた教科書の開発です。これまでのところ、日本語教育ではいつもアメリカの教科書が使われてきましたが、これは、第3語を迂回して日本語を学ぶのですから、言語教育上まさに疑問の余地あるやり方といわなければなりません。現在、手に入れることのできるドイツの教科書は、大学の授業には役に立ちません。ですから、目下、ベルリンとボーフムで、新しい教科書が開発されているところです。

さらに、それを越えて、私たちは次の3つのやり方を通じて、将来の更に進んだ改良の可能性がもたらされると考えています。第1は、ビデオ・レコーダーの使用で

す。第2は、生れてからずっと日本語を使っている人々（いわゆる Native Speakers）との協力を更に強めることと、語学の授業以外の授業でも日本語を使用することです。第3は、学生時代に確かに日本語は勉強したことがあるものの、日本語をどのように教えるかという方法については学ばなかった教師たちを、すぐれた言語教育学的立場から、再訓練することです。

話しをおえるに当って、ボン政府機関で働いている或る知人が、私に話してくれた一つのエピソードを紹介したいと思います。それは過去10年間の日本語教育の発展について、多くのことを教えてくれるかも知れません。その知人は、あるとき、翻訳業務のために、新しく共同作業者を採用する必要に迫られました。ヤパノロジーを卒業したという1人の志願者がやって来ました。少しの間、2人でおしゃべりをしたあと、役人が『読売新聞を読んだことがありますか』と志願者に尋ねました。それに対してその人曰く。「ヨミウリですって？ ふうむ。えーと。ヨミは読むことですよね。そしてウリは売ることですからえーと。ふーむ。いったい何のことですか』。そこで、その役人である知人は、その人に将来、自分をもっとよく売りこむためには、一生懸命『読売』を読んだ方がいいと奨めて、採用を見合せたということです。

この小さなエピソードは、仕合せなことに、ほぼ10年前に起った出来事でした。その後、西ドイツにおける日本語教育は、遙かに進歩して、私たちの大学の卒業生たちは、単に自分自身をよく『売りこむ』ことができるばかりでなく、日本とドイツという2つの社会の間、またそこに生きている個人たちの間に横たわる、より広い地平に立って、賢明にも、両者のコミュニケーションを下から支えることも、できるようになっている——私はそう希望しています。10年前の西ドイツに欠けていたのは、日本語を多角的に我がものにするという必要の自覚でした。この自覚は、この10年のあいだに、学生たちと教師たちに、行きわたるようになりました。いま問題となるのはこの自覚をどのようなやり方と方法で最適に実現できるかということです。だからこそ、——ここでもう一度、同じことをはっきりと口にするのを許して載きたい——だからこそ、このセミナーは、その多種多様な刺激によって、有難くも、また意義深い援助を私に与えてくれたのであり、それに対して、私は、日本国際交流基金と、このセミナーに協力されたすべての方々に心からの感謝を捧げたいと思う次第です。